

# The production of vermicelli in the Shandong Province and the rural economy in modern China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7688">http://hdl.handle.net/2297/7688</a>

# 近代山東省における粉条の 生産から見た農村経済の特質

弁 納 才 一

## はじめに

20世紀前半における山東省の主要な物産の1つとして粉条（粉条子）があった<sup>(1)</sup>。そして、山東省で生産された粉条は、現在でも中国各地で主に粉条と称されて広く消費されている。

20世紀初期に日本人によって作成された調査資料によれば、「粉条子ハ邦人ノ所謂豆素麵ニシテ」<sup>(2)</sup>、あるいは、中国では「粉条トモ称シ英語ノ所謂Vermicelli」のことであり、日本語では「豆素麵又ハ支那素麵トモ称ス」と言われていた<sup>(3)</sup>。また、「豆素麵（支那ニテハ粉干，粉糸，又ハ粉条子トイフ）」<sup>(4)</sup>は、日本の「素麵ニ似タル処ヨリ此称アリ支那ニ於ケル実名ハ粉条フェンテャオ又ハ粉干ト称ス」<sup>(5)</sup>とも言われていた。あるいは、1919年の調査資料では、粉条は「一般支那人ノ食料トシテ需用多シ」とされ<sup>(6)</sup>、また、1920年の報告でも、「支那ノ副食物トシテ常食スル豆素麵ハ其数量頗ル多ク」、「支那人ニシテ豆素麵ヲ食用セサル家ハ殆ト1軒モナシト云フモ敢テ過言ニアラス」としている<sup>(7)</sup>。

ところで、粉条・粉干あるいは豆素麵のうち「上等ナルモノ绿豆澱粉ノミニテ作ル（輸出品ハ多ク之レナリ）モ下等ナルモノハ」「黄豆高粱又ハ甘藷ノ澱粉ヲ加ヘテ製ス」という<sup>(8)</sup>。あるいは、「豆素麵ヲ作ルニハ必ス绿豆ヲ用フ绿豆ノミヲ以テ製シタルモノハ品質優良ニシテ土人ハ通常之ニ豌豆，小豆，高粱，甘藷等ノ粉ヲ混入ス」<sup>(9)</sup>という。また、粉条の「上等品ノ原料ハ専ラ青豆ナルモ下等豆ニアリテハ青豆ニ黄豆，稷又ハ甘藷ヲ混入ス」る

ともいう<sup>(10)</sup>。そして、粉条の「原料ハ緑豆ニシテ満州ヨリ其原料ノ供給ヲ受ク尚原料ノ補助トシテ地方産ノ黄豆高粱甘藷等ヲ混入スルモノアリ而シテ是等補助原料ヲ混入シテ製出セラレタルモノハ品質良好ナラス從テ又價格低廉ナリ」<sup>(11)</sup>という。

このように、粉条は、その最高級品は緑豆のみを原料とするもので、現在、日本で言う春雨のことであり、当時の日本では豆素麵と訳されていた。もっとも、山東省の中でも粉条の生産が盛んだった地域では粉条は経済的に重要な位置を占めていたものの、中国全国における生産・消費の数量上から見ると、粉条の経済的意味は決して大きくはなかった。このため、これまで本格的に取り上げられて研究されることはなかった。だが、粉条も近代中国とりわけ山東省の農村経済構造の特質を理解することができる重要な事例の1つである。

よって、本稿では、粉条そのものあるいはその生産が有していた経済的意義を分析することを目的とするのではなく、近代山東省における粉条の生産・流通・消費をめぐる諸状況に対する分析を通して近代中国農村経済構造の特質の一面を明らかにすることに重点をおいて考察したい。

なお、本稿は資料からの引用部分も含めて原則として常用漢字と算用数字を用いている。

## 1. 粉条の生産地と販売先

### (1) 粉条の生産地

1912年の報告によれば、山東省における粉条の生産地の産出割合は寧海(牟平県)が7割、黄県・招遠が2割、萊陽県が5分、蓬萊県・福山県が5分となっており<sup>(12)</sup>、『山東省視察概要』(1913年調査)によれば、黄県は「附近農家ニ於テ粉条子及粉皮子ヲ製造ス皇城ノ西北15清里ノ地狗皮集附近最モ盛」んだったという<sup>(13)</sup>。

また、『山東省ノ利源』(1914年)でも、粉条の「主タル産地ハ蓬萊、黄、招遠ノ3県ニシテ何レモ大規模ノ製造場アリ」と述べていた<sup>(14)</sup>。

さらに、1914年に刊行された報告書によれば、「粉条子ハ登州、黄県管内

ニ於テ粉房（豆素麵專業）或ハ農家ノ副業トシテ製造セラルルモ品質ノ佳良産額ノ大ナルコト招遠県ニ及ハス実ニ招遠県ハ粉条子製造ニ於テ支那第一ニ居レリ原料技術ノ優秀ナルハ勿論ナランモ第一水質ノ粉条子製造ニ適セルカ為ナリ」という<sup>(15)</sup>。

もちろん、粉条は原料である緑豆の生産地の「満州に於て産出すれども、山東省を以て最も有名」で、芝罘（後の煙台）と龍口が二大集散地となっており、1910年代初頭に芝罘に集散した粉条は21万包（1包は120～130斤）で、そのうち寧海（牟平県）から10万包、福山県から5万包、黄県から3万包、招遠県から2万包が来ており、一方、龍口からは1912年に4.4万包の粉条が移輸出されたが、1913年上半年には合計2,287包（1包は150斤）が汽船によって移出され、そのうちの2,100包までが芝罘に移出された。また、その主要な生産地の製造戸数は、寧海（牟平県）に42～43軒、福山県に22～24軒、招遠県に3,000～5,000軒余りだった<sup>(16)</sup>。

ところで、後述するように、粉条は明末清初には甘藷を原料としていたものが、近代になってから緑豆に代わったものだが、近代になっても甘藷を原料として粉干と称して生産しているところもあった。例えば、調査資料第10輯（1918年）によれば、山東省南東部に位置する日照付近の「濤雒石臼所等各地沿海地ヨリ移出スル粉干ハ其ノ額多シ此等ハ日照各地ニ於テ盛ニ製造セシモノノ来集スルモノニシテ殆ト農家ノ副業ナリ就中徐家窪（北110支里）ハ粉干製造処トシテ最モ有名ナリ」,「将来ハ地方甘藷ノ巨大ナル産品ニヨリ粉干製造業ノ改良ヲナスト共ニ造酒業、澱粉製造業等改良発達ノ余地充分アルヘシ」と見られていた<sup>(17)</sup>。

また、調査資料第11輯（1919年）によれば、膠州搭埠頭から移出されていた粉条は、「高密県下ヲ主要地トストモ」、膠県「下ノ産出モ亦少カラス」とされ、主として寧波に向けて船積みされていた<sup>(18)</sup>。

調査資料第17輯（1919年）では、粉条は山東省の「地方農家ニテハ閑散時ニ於ケル家庭副業トシテ製造」され、とりわけ「招遠県下黄山館付近一帯ニ盛ニシテ其他黄県下黄城集付近ヨリモ製出」していた<sup>(19)</sup>。また、黄県は粉条の「製造盛ニ且其製品ノ優良ナルヲ以テ知ラ」れ、その「製造地方ハ県ノ西郷ヨリ招遠県下ニ涉リ黄山館付近即チ界河ノ沿岸及ヒ県ノ北郷ヨリ蓬萊県

下ニ涉リ黄城集付近即チ黄水河沿岸ノ良水ヲ得ラルル地方トニ発達ス」という。そして、「各村ノ製法ハ一モ工場ノ如キ大規模ノモノナシ普通農家ノ副業的ニ生産スルモノナルカ推粉家ト称スル粉条子製造ヲナス家ハ少クトモ3間房子及資金ニ260吊文ヲ要ストイヘハ各村ニテモ相当資産アルモノノ従事スルモノ」とされていた<sup>(20)</sup>。さらに、「芝罘ニ集散スル」粉条の「産地ハ福山牟平萊陽蓬萊黄県招遠ノ諸県ナレトモ招遠黄県ハ殆ント龍口輸出ニ限ラレ」、芝罘に「至ルモノハ牟平県ヲ最モ多シトス其ノ製品ノ品質ハ黄県物ヲ第一トス」とされている<sup>(21)</sup>。

1919年末の報告によれば、粉条は芝罘の「近県地方農家の副産物にして其生産高は1年約4,000万斤に達し」、その「産地を挙げれば福山、牟平、萊陽、蓬萊、黄県、招遠の諸県にして就中牟平県を一等とし其製品の品質に在りては黄県物を以て最良」と評価されていた<sup>(22)</sup>。

『山東之物産』第5編（1921年）によれば、「土法ニヨリテ製造スルハ山東省ヲ以テ最モ盛ナリトス殊ニ芝罘ハ之カ集散地ニシテ其ノ主ナル産地ハ牟平、福山、招遠、棲霞、黄県、萊陽等」だったとしている<sup>(23)</sup>。

1923年初頭の報告によれば、芝罘は「支那に於ける豆素麵の産地として第一を占め福山牟平萊陽方面に産するものは芝罘に集まり蓬萊、黄、招遠の諸県に産するものは龍口に集まり此両港の輸出額は支那各港総輸出額の実に8割以上を占むる」という<sup>(24)</sup>。

1931年の調査によれば、招遠県の「農家の60%は皆製粉製造業と関係があり、其産額は龍口に集るものゝ70%に及」び、招遠県の「外に黄・掖二県の一部も亦同様の生産があった」という。さらに、「龍口粉条と称するものゝ中、招遠産70%、黄県産20%、掖県産10%」だった（図2を参照）<sup>(25)</sup>。ちなみに、1931年における招遠県の粉条製造量は約75万包だったという<sup>(26)</sup>。なお、招遠県で粉条の製造業が盛んになったのは19世紀末に浙江省「寧波人が龍口に粉莊を始めてから」であり、1910年代には大いに隆盛となったという<sup>(27)</sup>。

表1を見ると、1930年代初頭には、生産戸数が4,000戸を超え、作業従事者が1万人を超えていたのが沂水・陽穀・威海・汶上・朝城・鉅野・招遠の各県で、1戸当たりの作業従事者は全ての県で平均2～5人と小規模だった。また、1戸当たり生産量と1人当たり生産額では、粉条の生産がそれほど盛

表 1. 1930年代初頭山東省主要各県における粉条の生産状況

a 生産戸数 (軒)	沂水 10,000	陽穀 6,000	威海 6,000	汶上 5,000	朝城 4,500	鉅野 4,221	招遠 4,000	莘県 2,500	黄県 1,500	定陶 1,100	即墨 1,000	牟平 800
b 作業人数 (人)	汶上 25,000	沂水 20,000	招遠 20,000	威海 20,000	鉅野 12,663	陽穀 12,000	朝城 10,000	黄県 7,500	莘県 6,000	即墨 5,000	定陶 4,200	牟平 3,000
$b \div a = 1$ 戸当り人数	5	2	5	3.33	3	2	2.22	5	2.4	5	3.81	3.75
c 年産量 (担)	萊陽 91,929	招遠 79,307	黄県 22,659	掖県 11,329	汶上 9,000	牟平 8,000	沂水 6,666	威海 4,000	鄒県 2,333	章邱 1,706	滋陽 1,700	莘県 1,666
$c \div a = 1$ 戸当り産量	—	19.826	15.108	—	1.8	10	0.66	0.66	5.83	26.65	5.66	0.66
$c \div b = 1$ 人当り産量	—	3.96	3.0212	—	0.36	2.66	0.33	0.2	1.16	5.33	1.7	0.27
d 年産額 (元)	招遠 1,899,339	萊陽 1,881,327	黄県 542,668	掖県 271,334	汶上 180,000	牟平 160,000	沂水 100,000	威海 60,000	鄒県 35,000	章邱 25,600	莘県 25,000	滋陽 18,700
$d \div a = 1$ 戸当り産額	474.83	—	361.77	—	36	200	10	10	87.5	400	10	62.33
$d \div b = 1$ 人当り産額	94.96	—	72.35	—	7.2	53.33	5	3	17.5	80	4.16	18.7
$d \div c = 1$ 担当り産額	23.94	20.46	23.94	23.95	20	20	15	15	15	15	15	11

典拠) 実業部国際貿易局編『中国実業誌 (山東省)』第 8 編 (1934年) 467~469頁より作成。  
1 担は 50kg。

んだったとは言えない章邱県が最も高く、これに招遠県・黄県が次いでいた。さらに、1戸当たり年産額、1人当たり年産額、1担当あたり年産額の全てにおいて最も高かったのが招遠県だった。そして招遠県は年産総額においても首位にあった。

山東省の人口密度は北東部が最も高く、1人当たりの平均耕地面積は約 3 畝にすぎず、各県の窮民の多くは遠く東北まで出かけて生計を立てているが、招遠県は民間の気風が開けておらず、重農保守の思想に富み、外に出かける者はやや少なく、粉条を製造する副業の発展は必然の勢いであるとも言われている<sup>(28)</sup>。

だが、良水に恵まれていた招遠県では、貧農層ではなく、やや資産を有する農家が農閑期に良質でやや高価な粉条を生産していたというのが実情である。

粉条の原料である緑豆は渤海西北各地に仰いでいるが、毎年、龍口に移入されるのは約 20 余万担、煙台に移入されるのは約 4~5 万担で、威海に移入されるのは甚だ少なく、わずかに数百担で、合計 30 万担以上である<sup>(29)</sup>。

萊陽県では、清代に当地の緑豆を用いて粉糸が生産され、民国期になると生産者が全県各地に広がったが、譚格莊郷汪格莊村一帯で生産された粉糸が最も良質で、その大部分が龍口を通して輸出され、1933年には粉糸の生産者が400戸（萊西県を含む）、年間生産量が300トンとなっていた<sup>(30)</sup>。

招遠県は「龍口粉糸」の発生の地であるとともに主要な生産地でもあり、早くも明末清初には甘藷を原料とする粉糸が作られ始めていたが、清朝道光年間には緑豆を原料とする粉糸の生産が徐々に優勢になり、咸豊年間には粉糸の「作坊」（作業場）が県北部に広がり、1860年に龍口から招遠県産の粉糸が「龍口粉糸」として移出され、1930年代初頭に粉糸の「作坊」が県北部を中心としつつも県全域に広がり、『膠済鉄路沿線経済調査』（1933年）によれば、生産者は1,000戸余り、生産量は9,000トンだったというが、抗日戦争時期には衰退し、抗日戦争後に復興した<sup>(31)</sup>。

牟平県では粉糸の生産は農民の主要な副業として民国期に盛んになり、全県に普及し、抗日戦争時期に衰退したが、抗日戦争後は南部の山間地区で復興した<sup>(32)</sup>。

## (2) 粉糸の移輸出

1912年の報告によれば、粉糸は「芝罘重要輸出品ノ一タルノミナラス山東ノ特産物トシテ殊ニ南支那地方ニ珍重」され、1911年には「香港ニ輸出セラルモノ最モ多ク」、14万担余り、次いで上海が4万担余り、汕頭が2万担余りとなっており、「芝罘港輸出豆素麵八年々増加ノ趨勢ニア」ったという<sup>(33)</sup>。

1913年上半年期に「龍口輸出品ヲ代表スルモノハ豆素麵」で、「豆素麵ハ大部分ハ芝罘ニ向ケラルモノニシテ更ニ芝罘ヨリ香港、新嘉坡等ニ向ケ輸出」された<sup>(34)</sup>。

1913年の報告によれば、龍口の「輸入其大部分を占め其重なるものは穀物」で、「輸出品としては只豆素麵あるのみ豆素麵は芝罘に送られ」、また、黄県の「輸出品としては豆素麵あるのみ本品は黄県附近にて製せられ龍口産と共に芝罘に於て黄県条と称せられ上等品の部に属す」という<sup>(35)</sup>。

山東省における粉糸の集散地とされていた芝罘について、『山東省視察概

要』(1913年調査)では、「粉条子(豆素麵)ハ附近内地ニ於テ製造セラル绿豆ノミヲ以テ原料トシタル純良品ニシテ南支那地方ヘ向ケ輸出セラルモノ巨額ニ達シ年々増加ノ趨勢ニアリト云フ」<sup>(36)</sup>としている。他方、以上に挙げた粉条は、「煙台ヲ経テ上海、香港等ヘ輸出セラルモノ少カラス」<sup>(37)</sup>という。

『山東省ノ利源』(1914年)でも、粉条「製品ハ主トシテ南支那諸港、香港、海峽植民地等ヘ輸出」されたとしていた<sup>(38)</sup>。

1914年に刊行された報告書によれば、粉条「製造品ハ悉ク黄県龍口ニ於ケル粉荘(豆素麵問屋)ニ集リ、「龍口ヨリ戎克又ハ汽船ニテ芝罘ニ至ルモノ毎年6万包(140斤入)ニ上ル」という<sup>(39)</sup>。

そして、『山東省ノ経済的發展』(1915年)でも、山東省における粉条の「重要産地ハ芝罘附近ノ黄県ニシテ南支諸港、香港、澳門、海峽植民地等ニ輸出」<sup>(40)</sup>していたとしている。

他方、龍口について見てみると、1919年の調査資料では、粉条は特に山東省の龍口から「主ニ南方上海、香港等ニ輸送セラレ」、1918年に龍口から移輸出された豆素麵は、芝罘へ1.4万俵、香港へ0.6万俵、上海へ1.6万俵で、豆素麵(粉条)の「輸移出額ハ全輸移出額ニ対シ約9割強ヲ占メ即チ龍口輸移出貿易ハ豆素麵貿易トモイフヘキ」ほどだったとしている<sup>(41)</sup>。

1912年に龍口からの豆素麵(粉条)の移出額は移出総額の「9割を占め、龍口の輸出は全く豆素麵によりて代表せらると云ふも過言に非ず、而して之等の豆素麵は黄県、招遠より来るものにして、其輸出先は龍口と汽船民船の往来ある各港にして、營口・大連・芝罘・安東などがあつたが、とりわけ「芝罘より上海蕪湖等の米を輸入し、龍口よりは豆素麵を第一とし更に芝罘より香港新嘉波等に輸出」されていた<sup>(42)</sup>。



以上に述べてきたこと、及び、後述することから绿豆・粉条の流れをまとめたのが、 図1(1910年代)及び 図2(1930年代初頭)である。1910年代から1930年代初頭までの間に生じた最大の変化は、粉条の集散地として芝罘の地位が低下し、龍口に集められた粉条が芝罘を経由せず直接移出されるようになり、仕出地の中心も芝罘に近い寧海から龍口に近い招遠県に移ったことである。このような変化が起こった理由・事情とその経済的意味はどのようなものだったのだろうか。



図1. 1910年代における緑豆・粉条の流れ

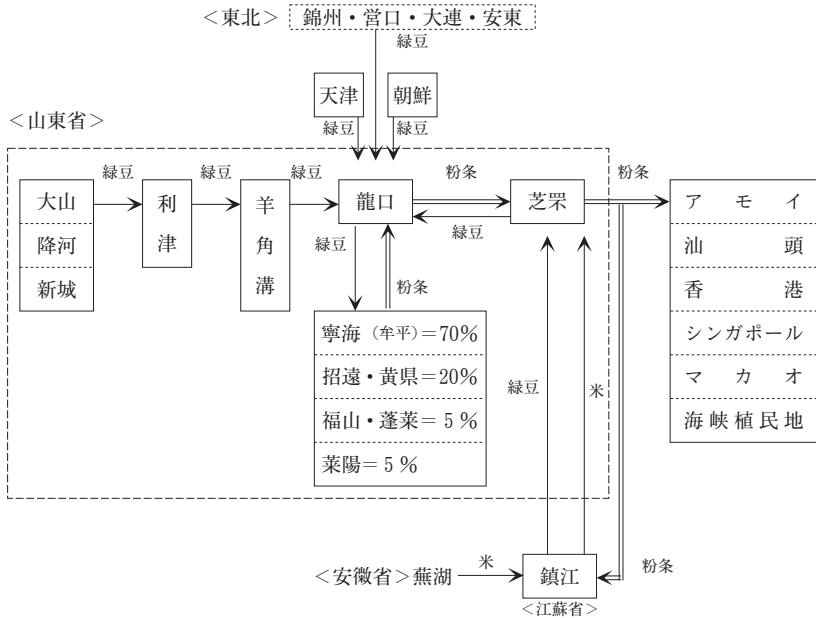


表2-1を見てみると、中国からの粉条の輸出量は1893年から急増し、また、表2-2・表2-3によって、1904~48年の中国における粉条の移輸出動向を見てみると、粉条の輸出先は主に香港であり、これにシンガポールがついており、一方、粉条の仕出し地は主に龍口及び煙台（芝罘）の山東省である。全国の輸出量と仕出し量のピークはともに1927年であるが、1932年に激減し始め、日中全面戦争が勃発した1937年の翌年の1938年からはさらに一層減少し、第二次世界大戦後になっても回復していない。仕出し地としては、第一次世界大戦勃発前後から大連や龍口が登場し、1922年まで煙台（芝罘）が首位を占め続け、1915年にピークを迎えていたのに対して、1923年以降は1937年まで龍口が煙台に代わって首位を占め続け、1927年にピークを迎えている。なお、第二次世界大戦後は龍口や煙台に代わって新たに青島が主要な仕出し地となっている。

1919年の調査資料によると、黄「県下ハ其面積ニ比シ人口稠密ヲ以テ知らレ土地肥沃農耕普シト雖穀類ハ年々之ヲ満州ヨリノ移入ニ仰ク」状態にあっ

図2. 1930年代初頭における緑豆・粉条の流れ

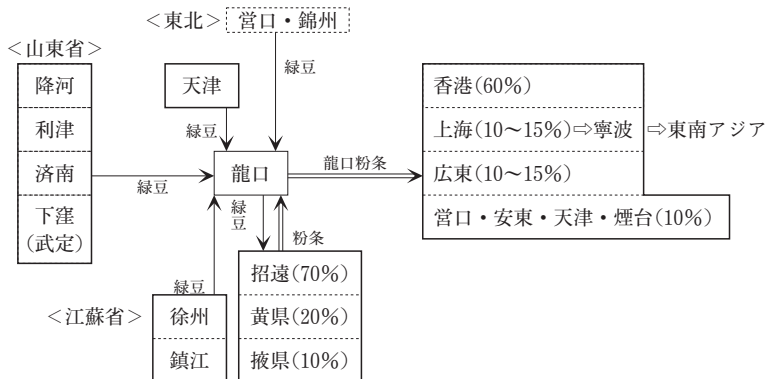


表2-1. 粉条の移輸出動向 (単位:担)

年度	輸出量	芝罘の移出量
1867	29,154	42,474
1868	33,457	46,036
1869	38,600	46,230
1870	38,814	50,482
1871	21,300	54,775
1872	40,052	69,540
1873	11,203	76,433
1874	15,339	73,382
1875	24,226	88,435
1876	33,776	72,879
1877	32,806	64,906
1878	30,263	90,314
1879	32,565	100,132
1880	26,990	103,319
1881	40,122	91,793
1882	44,829	118,560
1883	60,719	111,112
1884	52,384	104,217
1885	49,947	114,547
1886	56,581	121,346
1887	99,583	139,093
1888	62,901	147,874
1889	65,798	149,000
1890	71,570	151,742
1891	57,486	139,522
1892	81,347	163,901
1893	161,549	147,011
1894	160,829	143,665
1895	149,734	115,068
1896	158,118	155,052
1897	153,087	145,919
1898	154,496	139,353
1899	158,187	146,491
1900	177,586	151,851
1901	173,672	170,750
1902	190,061	170,449
1903	181,538	161,650

典拠) 《中国旧海関史料》編輯委員会編『中国旧海関史料 (1859-1948年)』(京華出版社, 2001年)より作成。

た。龍口は粉条の「輸出港トシテ有名」だった<sup>(43)</sup>。また、蓬萊「県下ハ丘陵高地僻壤ニシテ物資豊富ナラス移出品トシテハワツカニ少許ノ粉条子及果実アルノミ」で、粉条は「安東行年額1,000包」としている<sup>(44)</sup>。さらに、粉条は芝罘の「近県農家ノ副産物ニシテ其生産高ハ1年約4,000万斤ニ達シ」、芝罘における「重要輸出品タルヲ失ハス」、その「輸出先ハ主ニ香港其他ノ南支那諸港及海峡植民地ニシテ」、「欧州戦乱前ニ在リテ八年約2,000乃至3,000万斤ノ輸出額アリタルモ約半バニ減少スルニ至」ったという<sup>(45)</sup>。

ところが、やがて山東省における粉条の生産・流通には変化

表2-2. 粉条の移輸出動向 (単位:担)

年度	輸出量			仕出し量							
	総量	香港	シンガポール	総量	大連	龍口	煙台(芝罘)	漢口	厦門	汕頭	
1904	186,512	157,693	17,053	247,957	0	0	174,028	26,616	13,668	13,619	
1905	176,170	149,512	14,529	225,039	0	0	163,385	21,795	10,275	12,329	
1906	199,466	166,768	15,982	248,252	0	0	183,052	22,881	11,632	13,169	
1907	192,369	159,743	17,359	248,029	0	0	182,065	25,562	13,547	13,725	
1908	236,592	202,988	15,303	294,493	0	0	224,623	24,713	14,145	12,227	
1909	224,908	186,986	16,714	274,797	0	0	200,801	22,069	14,729	13,377	
1910	259,813	218,255	16,530	298,778	0	0	236,473	15,932	14,448	13,625	
1911	237,570	194,100	17,801	286,467	0	0	224,524	11,933	16,631	13,420	
1912	238,244	194,494	21,820	312,330		3	218,002	39,504	19,483	15,026	
1913	284,072	241,043	23,519	352,576		64	273,162	21,609	23,475	16,837	
1914	236,722	193,365	22,708	305,708		5,810	233,488	13,560	22,222	14,774	
1915	287,630	239,986	24,954	379,804		16,178	14,622	275,095	17,465	23,151	17,781
1916	232,731	188,422	25,914	317,899		1,648	26,084	211,850	18,065	23,649	20,373
1917	204,495	166,393	21,215	258,748		457	31,017	161,165	18,319	19,032	12,817
1918	182,378	153,766	14,063	249,354		1,071	44,775	137,157	23,316	11,988	12,517
1919	184,738	147,846	13,645	260,281		962	54,115	146,394	14,789	12,680	11,479
1920	222,668	176,307	24,306	297,492		4,108	76,131	164,930	15,020	23,991	12,143
1921	260,494	205,321	29,941	352,055		1,244	107,428	156,160	19,896	28,855	17,141
1922	263,459	220,104	17,131	356,168		1,129	141,030	148,955	17,010	19,183	11,575
1923	255,902	214,983	20,389	340,641		930	145,443	132,045	13,446	20,363	14,198
1924	276,986	236,522	18,780	370,720		1,291	157,887	145,722	16,545	20,093	12,999
1925	269,788	218,878	25,113	402,382		2,549	165,794	164,531	20,453	25,180	9,219
1926	262,186	210,457	27,142	432,166		2,876	200,819	139,248	33,910	32,370	10,418
1927	334,083	288,222	30,408	483,514		5,009	262,137	140,468	16,942	36,985	9,119
1928	315,479	269,275	24,595	429,904		7,827	238,929	113,151	19,542	30,771	7,115
1929	296,976	242,309	27,002	446,908		8,634	237,947	122,376	16,728	37,335	6,351
1930	271,787	225,495	22,944	457,920		10,972	242,579	138,162	13,183	34,227	5,055
1931	214,029	169,030	19,734	433,987		16,053	204,489	156,102	8,028	30,967	4,453
1932	160,436	130,203	11,799	223,730		1,509	113,296	99,929	5,681	83	456

典拠) 表2-1に同じ。

表2-3. 粉条の移輸出動向 (単位:公担)

年度	輸出量					仕出し量							
	総量	香港	シンガポール	インドシナ	フィリピン	総量	龍口	煙台	青島	漢口	上海	汕頭	広州
1933	124,120	108,027	7,798	103	6,453	237,060	131,315	96,555	425	6,503	438	595	809
1934	121,649	105,699	9,005	53	2,545	142,919	87,053	51,680	162	2,516	239	308	467
1935	123,120	93,143	12,615	3,856	5,651	158,870	93,425	56,871	100	7,427	219	183	444
1936	115,173	87,734	9,411	7,030	5,862	177,487	101,005	69,998	128	5,007	140	425	472
1937	114,703	85,177	9,957	5,950	7,323	132,790	71,410	58,530	306	1,327	154	283	517
1938	68,379	59,904	3,443	316	3,267	71,079	32,297	35,252	1,149	99	1,386	537	256
1939	66,678	53,452	4,058	1,198	4,364	94,137	64,728	25,547	3,036	24	419	163	5
1940	68,394	55,552	0	2,260	1,510	87,497	61,027	21,784	4,121	0	508	0	0
1941	64,942	50,775	0	2,041	1,625	78,331	53,811	18,124	6,126	0	144	0	34
1942	7,297	0	0	2,808	0	33,384	22,424	3,966	3,792	0	1,116	0	435
1943	-	-	-	-	-	25,622	12,112	3,378	6,383	0	2,306	0	6
1946	9,276	6,210	263	2	2,523	27,649	0	0	14,206	0	6,506	41	379
1947	19,075	12,024	605	14	5,180	45,074	0	0	13,401	2,480	10,134	464	1,936
1948	19,187	8,738	339	3	4,560	52,950	0	994	23,319	2,988	11,627	190	4,263

典拠) 表2-1に同じ。「-」はデータがないことを示している。1公担は100kg。

が生じたようである。生産地の中心地が招遠県となり、集散地・移出港としての芝罘の地位が龍口にとって代わられた。

1920年の報告によれば、東北の「奉天ニ於ケル豆素麵ノ製造販売店ハ大概50軒ニ近ク」、その生産量は「1ヶ年少クモ百五六十斤ニ上ル」が、「尚需要ニ充ツル能ハスシテ自然原料製品共ニ安価ナル西錦州地方ヨリ毎年3、4万斤ノモノヲ奉天ニ移入シテ市場ニ出スト云フ」とされている<sup>(46)</sup>。

『山東之物産』第5編(1921年)によれば、「最近ニ至リ龍口ヨリ輸出セラルル額モ逐次増加シツツア」り、芝罘から輸出される粉条の主要な輸出先は香港・ウラジオストーク(ロシア)・日本・朝鮮であり、中国「内地ニ於ケル主ナル仕向先ハ上海、汕頭、厦門、寧波、福州等ナリ龍口ヨリ輸出スルモノノ仕向先ハ營口、大連、芝罘、安東等」だったという<sup>(47)</sup>。

1920年代初頭には「煙台の粉条は多く香港に向けられ、龍口の粉条帆船で寧波に向けられ、其数量は其当時の輸出量の50%を占めてゐた」が、1920年代後半には「30%に減じ」、「龍口粉条が香港市場に名声を博し、煙台粉条が漸次退却を始めてゐた」という。また、1914年に「龍口港から輸出した粉条は3-4万包で」、1921年に「頂上に達し約13万包前後となつた」が、その後、漸次減退して、1930年には11万包となり、1931年には10万包を超えなかった。これに対して、粉条製造業が発展しつつあった大連では1921年にわずかに3,000包の粉条を移出しただけだったが、10年後の1931年には粉条の移出量は10倍の3万包に達していた<sup>(48)</sup>。

そして、1931年の調査によれば、図2に示したように、山東省で生産された粉条にとって上海・寧波・香港・広東などは「皆重要な輸出地であって、特に香港向が最も多く、全輸出の60%を占める。而して之等の最後の行向は明かでないが、南洋一帯の華僑用に転送されるものゝようである。その余は広東、上海で消費せられ、各々10-15%に当る。現在寧波は航運関係から全部上海経由で転送される。上記各地以外では營口、安東、天津、煙台等へ向けられ、其量は全体消費額の10%に当る。」という<sup>(49)</sup>。

『山東之物産』第5編(1921年)によれば、「豆素麵ノ製造ハ大連ニ於テモ中日粉干公司ノ如キ邦人ノ手ニヨリ行ハルルモノアルニ至リシモ土法ニヨリテ製造スルハ山東省ヲ以テ最も盛ナリトス」という<sup>(50)</sup>。

1931年の調査によれば、「招遠県は黄及び掖両県に比べて龍口よりの距離最も遠く、重農地区であり、海外に出て商売を行ふ者も比較的少いから粉条製造業は極めて発達してゐる。招遠県城の西北方一帯はこの製造業が集中してゐる所である」と言われている。そして、「龍口粉条製造区では年300余万円を産し、これによって生活するもの数万戸、20-30万人に達し」ていたが、「近時販路が競争者の圧迫の爲漸次縮小してゐる」という<sup>(51)</sup>。

以上、山東省における粉条の中心的な生産地は、1910年代初頭に産出量の7割を占めた寧海（牟平県）から1930年代初頭には産出量の7割を占めた招遠県へ移動していったとともに、従来は龍口から芝罘（煙台）を中継して華中や華南に移出していたが、やがて龍口から直接移出されるようになった。また、19世紀末に本格化した粉条の生産は、1921年にピークに達した後、徐々に減少していった。そして、これと並行するように、従来は山東省へ粉条の原料の緑豆を大量に移出していた大連で粉条の生産が勃興して発展していた。総じて、1920年代は、山東省における粉条の生産にかかわる従来の地域間分業構造が変容する時期だった。

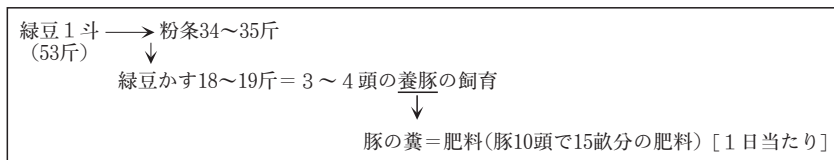
### (3) 副産物

粉条を生産する過程において、その副産物として緑豆の豆かすが生じる。この緑豆かすは、養豚の飼料、最貧困層の食糧、農耕地の肥料となり、さらに、養豚の過程において生じる豚の糞が農耕地の肥料となる（図3及び図4を参照）。

『山東省視察概要』（1913年調査）によれば、黄県では粉条の「製造ニヨリテ生スル糟ハ肥料及家畜ノ飼料ニ供セラ」れ、「肥料ハ土糞（人糞馬糞及粉条子粕）6分豆粕4分位ノ割合」であるとされている<sup>(52)</sup>。

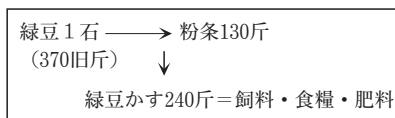
1931年の調査によれば、「龍口に於ける豆1石の重量370斤（旧制斤）前後で、それから130斤の粉条が作られる。則ち之等の差、240斤の物質は尽く農村に残留し、家畜の飼料となり、農民の食糧となるが、最後には糞尿となつて羽毛、角骨、其他の廃棄部分と合して肥料とな」り、その「施用圃場の生産力は普通の畑に比べて2倍の増収を示す」とされていた（図4を参照）。このため、山東省では、「食糧の生産状況からみれば、粉条製造の未だ発達

図3. 1910年代前半における粉条の生産と養豚の関連



典拠)「山東省の豆素麵」(『支那』第6巻第2号, 1915年1月15日) 14~15頁より作成。

図4. 1931年山東省龍口における粉条の生産と副産物



典拠) 華北食糧平衡倉庫『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』資料第4輯(1934年) 42~45頁より作成。

しない頃は縦ひ極めて豊作であっても食糧不足であったが現在は不足の虞がないと云つてゐる」という。また、「粉条製造の副産物は常に豊富な養分を含有してゐて養豚には好適の飼料である。当地の農家は之で養豚を行ひ、少なからざる収入を増加してゐる。たゞ一家に1, 2頭を飼育せるに過ぎず、尚未だ充分利用すべき余地がある」とし、その根拠として、「河南省信陽一帯の粉条製造業者」で「毎日原料80斤を消費する者は豚60頭を育成する」という例を挙げている<sup>(53)</sup>。

山東省における粉条の主要な生産地において農民は緑豆かすを養豚の飼料としてではなく、主に肥料として農地に投入した。養豚は肥料の1つとしての豚糞を確保・自給することが主要な目的であったことがわかる。

## 2. 緑豆の生産

### (1) 緑豆の生産地

『中国実業誌(山東省)』(1934年)は、山東省では、緑豆は米といっしょに煮て粥にしたり、緑豆糕(干菓子)を作ったり、もやしとして栽培して

「蔬菜之用」に供したりすることができ、あるいは、粉にして粉乾（粉干）・粉皮を作って遠くまで販売したと説明している。そして、1933年の山東省における緑豆の栽培面積は、魚台县（36万市畝）が最大で、曹県（35万市畝余り）・齊東県（33万市畝余り）・鉅野県（31万市畝余り）が続き、さらに、汶上・金郷・郟城・定陶・莘・臨清などの各県が10万市畝を超え、一方、生産量は、齊東県（43.3万市担）が最多で、鉅野（34.5万市担）・曹（28.2万市担）・魚台（21.6万市担）の各諸県が続き、汶上・金郷・郟城・莘・臨清などの諸県が10万市担を超えていた<sup>(54)</sup>。

このように、山東省における緑豆の主要な生産地は、すでに見てきた粉条の主要な生産地とはほとんど一致していなかった。

このことから、2つの疑問が生じる。すなわち、山東省の中において緑豆の生産が盛んな地域でなぜ粉条の生産が盛んにならなかったのか。また、粉条の生産が盛んな地域でなぜ緑豆の生産が盛んにならなかったのか。

そこで、まず粉条の主要な生産地における緑豆の栽培面積と生産量の実態と農産物の作付状況はどうなっていたのかを見てみよう。表3-1を見ると、1930年代前半における粉条の主要な生産県では緑豆の栽培はそれほど盛んではないが、黄県・掖県・招遠県は単位面積当たりの生産量で山東省全県の平均を上回っており、また、主要な作物を見ると、黄県と掖県では小麦に高粱・粟・玉蜀黍・大豆などの雑穀類が続き、招遠県では高粱・粟に玉蜀黍・甘藷が続いている。そして、黄県では小麦・高粱・玉蜀黍が、一方、招遠県では高粱・粟・玉蜀黍が単位面積当たりの生産量で山東省全県の平均を上回っており、これらの地域は相対的に肥沃な耕地に恵まれていたと言ってよい。このように、粉条の主要な生産地で農作物の生産性が平均より高かったのは、すでに見たように、粉条を製造した後に残る緑豆かすを肥料として農地に投入したからであろう。

以上のように、山東省における粉条の主要な生産地では、その原料である緑豆の生産はそれほど盛んでなく、むしろ小麦・高粱・粟・玉蜀黍などの穀物や甘藷・大豆の生産を中心としていた。だが、それにもかかわらず、山東省においては食糧を自給することができず、東北などからの移入に頼っていた。

例えば、1919年の報告によれば、黄「県下八面積ニ比シテ人口稠密ニシテ

表3-1. 1930年代前半における粉条の主要生産県の各種農産物作付状況  
(単位: 万市畝・万市担, 1畝当りは市担)

		緑豆	小麦	高粱	粟	玉蜀黍	甘藷	大豆
黄県	面積	0.25	32.4	4.6	4.8	10.8	—	18.5
	産量	0.5	48.6	13.9	9.7	32.5	—	14.8
	1畝当り	2.0	1.5	3.02	2.02	3.0	—	0.8
掖県	面積	0.02	40.0	17.0	15.0	—	0.1	25.0
	産量	0.02	43.6	20.4	22.5	—	1.5	30.0
	1畝当り	1.0	1.09	1.2	1.5	—	15.0	1.2
招遠	面積	1.6	6.5	18.6	19.0	13.0	7.8	8.4
	産量	2.4	7.4	66.9	68.2	33.8	43.6	1.0
	1畝当り	1.5	1.13	3.59	3.58	2.6	5.58	0.11
福山	面積	2.7	3.7	3.4	5.2	0.4	—	4.1
	産量	2.2	5.6	4.7	5.8	0.5	—	3.2
	1畝当り	0.81	1.51	1.38	1.11	1.25	—	0.78
寧海 (牟平)	面積	—	49.8	5.3	21.0	9.2	25.3	36.7
	産量	—	59.7	6.5	25.2	10.6	506.0	66.2
	1畝当り	—	1.19	1.22	1.2	1.15	20.0	1.8
全県平均	面積	3.9	37.3	17.4	—	—	—	24.0
	産量	3.8	44.8	32.0	32.7	14.1	—	31.9
	1畝当り	0.87	1.20	1.83	2.08	1.79	13.84	1.33

典拠) 実業部国際貿易局編『中国実業誌 (山東省)』第5編 (1934年) 10~106頁より作成。  
表中の「—」はデータがないことを示している。

土地肥沃ナル農耕ニ適スト雖モ耕食自給ニ足ラス住民為ニ四方ニ出稼ノ風習ヲ成」しているという<sup>(55)</sup>。

また、同じく1919年の報告によれば、掖県では「農産物又収穫不良ナラサレトモ」, 「人口稠密ニシテ需用ニ足ラス他地ヨリ移入スル額多シ住民ハ亦年々満州出稼ノ風習盛ンナリ」とされており、しかも、掖県における粉条の生産に関する記述がなく、農村の副業としては近隣の平度・濰県・昌邑とともに麦稈真田の生産が盛んだったという<sup>(56)</sup>。

粉条の主要な生産地では、その原料の緑豆よりもむしろ食糧となる穀物の生産が中心だったにもかかわらず、なお食糧を自給することができなかったことから、粉条を生産する農家は粉条を販売して原料となる緑豆とともに食糧となる穀物をも購入する必要があったことになる。逆に言えば、粉条の生



産地で食糧が不足しているのは、穀物の生産性が低いためではなく、また、穀物の作付割合が低いためでもなく、粉条の生産によって得た収益で食糧を購入することが可能になったためである。

## (2) 緑豆の仕出し地

上等な粉条の原料である緑豆は粉条の生産地で自給していたわけではなく、そのほとんどを移入に頼っていた。

例えば、1913年上半年に山東省龍口から移出された粉条の原料となっていた「緑豆ハ羊角口、利津、大山、降河等ヨリ民船ニヨリテ来ルモ多ク又鎮江ヨリ芝罘ヲ経テ来ルコトモア」ったという<sup>(57)</sup>。あるいは、1917年6月の調査によれば、特に「龍口附近二行ハルル豆素麵ノ原料緑豆ハ多クハ羊角溝（利津）經由品多ク」<sup>(58)</sup>、また、1919年に刊行された報告書でも、「龍口附近ニ製造スル豆素麵ノ原料ナル緑豆ハ羊角溝經由品（利津モノ）多」<sup>(59)</sup>かったとしている。

これに対して、『山東省ノ利源』（1914年）では、粉条の「原料中ノ青豆ハ土地産品ノ外天津、錦州等ニ仰」いでいたとしており<sup>(60)</sup>、また、1914年の報告書によれば、粉条の「原料ハ主トシテ直隸及満州産ノ緑豆ニシテ大部ハ天津ヨリ汽船ニヨリ龍口港ニ輸入セラレ馱馬驢等ニヨリ招遠県ニ運搬セラル」<sup>(61)</sup>という。そして、『山東省ノ経済的發展』（1915年）でも、山東省の粉条は「主トシテ満州産ノ緑豆ヲ以テ製ス」としている<sup>(62)</sup>。さらに、1919年の調査資料によれば、粉条の「原料タル緑豆ハ渤海沿岸ナル直隸山東満州ノ各地方ヨリ来ルモ主ニ錦州、天津、羊角溝方面ヨリ汽船民船ノ便ニヨリ龍口ニ集マリ更ニ馱載ニヨリテ」「招遠、黄、蓬萊、牟平、文登等ノ各県下」の「各村落ニ運搬」されたという<sup>(63)</sup>。

そして、『山東之物産』第5編（1921年）によれば、「原料ノ主要品タル緑豆ハ主トシテ大連、営口、錦州、天津、朝鮮、羊角溝、利津、新城等ヨリ来リ時ニ鎮江其他長江沿岸ヨリ来ルコトアリ」としている<sup>(64)</sup>。

さらに、1931年の調査によれば、龍口に集散する粉条にとっては「緑豆が唯一の原料であつて、渤海沿岸の西北各地から龍口に集る。大連、営口、錦州、天津、江河（利津の東）、利津、済南、下窪（武定）等は皆重要産地で」

あり、「北方の原料が欠乏する時は徐州、鎮江一帯から集買」していたが、「品質は營口、錦州、大連に産するものが最も良く、天津産之に次ぎ、其他は最も劣る。但し近来大連の粉条製造業進歩し、消費原料が甚だ多くなり、該地から来るものはなくなつた。龍口に輸入される量は年約10万石である」という<sup>(65)</sup>。

以上、山東省における緑豆の主要な生産地では緑豆を移出していたが、それは粉条の主要な生産地へは向かわなかった。一方、山東省における粉条の主要な生産地は、粉条の原料となっていた緑豆の主要な生産地ではなかった。このため、山東省における粉条の主要な生産地では、主に東北から緑豆を移入していた。

以上のように、粉条の主要な原料である緑豆は、山東省内でも生産され、時には一部が江蘇省からも移入されたが、その大部分は河北省や東北から移入されていた。そして、いずれにせよ、山東省における粉条の原料生産地と製品加工地は分離していた。

1917年の調査によれば、山東省歴城付近の黄台橋における「移出品」のうち、緑豆は「満州産ト東阿産ト殆ト伯仲ノ間ニ有リ（例年ハ東阿外山東奥地産ヲ主トス）沿岸各地及羊角溝經由龍口煙台地方ニ仕向ケラル多クハ粉条子ノ原料ニ供」されたという<sup>(66)</sup>。

それでは、第一次世界大戦頃から粉条の仕出し地として登場してきた大連、あるいは、山東省の龍口を通じて山東省に緑豆を移出していた營口や錦州の状況はどうだったのだろうか。統計によって緑豆の移出動向を確認できるのは1913年からであるが、1913年から1924年までは、青豆（グリーンピース）と緑豆が合算された数値であり、緑豆のみの数値を確認できるのは1925年以降のことである。

表3-2を見ると、1913～30年における緑豆の移出総量は年度ごとの変動がかなり激しいものの、この期間に増加傾向と減少傾向のどちらかにあったのかを断定するのは難しい。ただし、緑豆の仕出し地として大連と營口を合わせた東北の移出量が最も多く、これに華北の天津、華中の南京が続いていた。このうち、大連については、1916年から急増して1923年にピークをむかえているが、營口は1925年から激減している。山東省における粉条の生産に

表3-2. 緑豆の移出量と仕出し地 (単位:担)

年度	移出総量	天津	大連	營口	漢口	南京
1913	1,027,857	127,915	16,443	238,331	117,883	143,611
1914	909,715	293,518	55,553	232,490	105,204	39,781
1915	1,124,657	471,145	59,322	314,507	157,697	23,457
1916	849,241	140,303	100,184	293,765	191,125	51,783
1917	541,118	49,262	122,434	123,892	113,182	24,289
1918	508,416	114,483	104,912	93,228	47,608	63,684
1919	1,365,733	591,107	248,643	93,151	10,078	209,436
1920	781,627	58,316	217,103	106,440	19,431	194,459
1921	1,030,594	421,676	234,370	230,832	9,240	58,056
1922	1,364,212	471,842	305,591	315,154	30,658	73,478
1923	1,096,099	276,642	383,909	227,357	14,307	83,033
1924	1,062,145	247,790	366,315	194,093	5,441	123,394
1925	665,615	169,029	259,488	23,129	0	136,664
1926	1,181,844	682,945	323,057	44,971	0	103,088
1927	1,103,673	307,677	579,358	107,268	0	9,794
1928	766,923	99,400	219,218	51,359	0	89,551
1929	967,107	186,420	190,121	23,114	0	181,246
1930	1,312,209	627,847	178,109	57,569	0	189,039

典拠) 表2-1に同じ。ただし、1913~24年は「青豆、緑豆 (BEANS, GREEN)」, 1925~30年は「緑豆 (BEANS, GREEN, SMALL)」の数値を示している。

とって重要な原料供給地となっていた大連・營口・天津の緑豆移出量の動向は、山東省における粉条の生産動向にも大きな影響を与えたと考えられる。そして、その緑豆移出量の変化は、東北・華北における緑豆の生産・消費動向と大きく関連していると考えられるが、その点に関する分析は別稿に譲りたい。

#### おわりに

山東省の特産物の1つとなっていた粉条については、原料生産地・加工地・消費地が分離していたこと、すなわち、その原料である緑豆の主要な生産地が東北で、その主要な加工地・生産地が山東省であり、粉条の主要な仕向地・消費地が華中・華南・東南アジアとなっており、粉条をめぐる経済関係が広域化して、一つの経済構造が形成されていたことがわかった。よって、山東

省では原料の緑豆と食糧の穀物が作付けにおいて競合することはなかった。

そして、やがて原料の供給地だった東北においても大連を中心として粉条製造業が盛んになり、山東省の模倣品として品質は悪いが、相対的に安価な粉条が生産されるようになると、粉条をめぐる経済関係にも変化が生じ、従来の粉条生産地の中心地だった山東省と競合するようになった。

山東省における粉条の生産をめぐる20世紀前半に発生した主要な変化は以下のとおりである。

まず、第一に、粉条の移出港が芝罘から龍口へ移行していったことである。これは、芝罘を経由せずに粉条の生産地に近い龍口から直接消費地へ移出されたために生じた変化である。

また、第二に、粉条の生産地が山東省から東北へ移行した。これは、原料(緑豆)生産地の東北と加工(粉条生産)地の山東省の地域間分業から原料生産地における一貫生産へと変化したためである。

以上のことは、生産・加工技術の高さ・優位性の保持とその解消の動きを表しており、それは高品質の原料(農産物)生産の有無が基礎となっていた。

近代山東省における農家の副業の1つとして粉条の生産があったが、その経済的意義は単に山東省の一地域の農村だけにとどまらず、山東省という地域をも越えた広域的なものだった。すなわち、超域的意義を持つものであり、近代中国農村経済の特質を理解する上で重要なものだった。また、粉条製造業は、外来品との競争がない点では綿業などとの違いが見られるが、伝統的な産品ではなく、海外での需要の拡大に伴って近代になってから勃興した点では酒造業とも違っていた。

#### 注

- (1) 拙稿「日本の青島占領支配時期における山東省の物産調査について」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第27号, 2005年3月)。
- (2) 青島守備軍民政部鉄道部『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市)調査報告書』調査資料第17輯(1919年)277頁。
- (3) 青島守備軍民政部『山東之物産』第5編(1921年)85頁。
- (4) 「芝罘に於ける豆素麵需給状況」(『通商公報』第687号, 1920年1月8日)7頁。

- (5) 「芝罘ニ於ケル豆素麵」(『通商彙纂』第15号, 1912年10月10日) 4頁。
- (6) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰縣芝罘間都市)調査報告書』247頁。
- (7) 「奉天ニ於ケル豆素麵産出状況」(『通商公報』第731号, 1920年5月31日) 44~45頁。
- (8) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰縣芝罘間都市)調査報告書』279頁。
- (9) 前掲書『山東之物産』第5編(1921年)86頁。
- (10) 参謀本部『山東省ノ利源』(1914年)24頁。
- (11) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰縣芝罘間都市)調査報告書』440頁。なお、全く同じ記述が「芝罘に於ける豆素麵需給状況」(『通商公報』第687号, 1920年1月8日)7頁にも見える。
- (12) 「芝罘ニ於ケル豆素麵」(『通商彙纂』第15号, 1912年10月10日)5頁。
- (13) 旅順民政部『山東省視察概要』1913年調査(関東都督府民政部『山東視察報文集』刊行年不詳)168頁。
- (14) 参謀本部『山東省ノ利源』(1914年)24頁。
- (15) 鉄道部庶務課『黄県濰縣間鉄道線路踏査報告書』経済調査(1914年)第8葉。
- (16) 「山東省の豆素麵」(『支那』第6巻第2号, 1915年1月15日)11~13頁。
- (17) 青島守備軍民政部鉄道部『南山東及江蘇沿岸諸港調査報告書』調査資料第10輯(1918年)142~143頁。
- (18) 青島守備軍民政部鉄道部『山東鉄道沿線重要都市経済事情・上』調査資料第11輯(1919年)213頁。
- (19) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰縣芝罘間都市)調査報告書』247~248頁。
- (20) 同上書, 277~278頁。
- (21) 同上書, 440頁。
- (22) 「芝罘に於ける豆素麵需給状況」(『通商公報』第687号, 1920年1月8日)7頁。
- (23) 前掲書『山東之物産』第5編(1921年)85頁。
- (24) 「芝罘に於ける重要輸出品状況」(『通商公報』第1,019号, 1923年1月15日)9頁。
- (25) 財団法人華北食糧平衡倉庫(華北産業科学研究所農林化学科主任三好政籌訳)『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』資料第4輯(1934年)3~4頁・38頁。
- (26) 同上書, 40頁。
- (27) 同上書, 1頁。
- (28) 実業部国際貿易局編『中国実業誌(山東省)』第8編(1934年)466頁。『中国実業誌(山東省)』第8編(1934年)464~480頁の後半部分は、『山東省立第一農事試験場工作報告書』(1931年12月刊行)をも参考にしたと思われるが、その邦訳として、前掲の『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』がある。
- (29) 前掲書『中国実業誌(山東省)』第8編(1934年)469~470頁。
- (30) 山東省萊陽市志編纂委員会編『萊陽市志』(齊魯書社, 1995年)159頁。

- 31) 山東省招遠県志編纂委員会編『招遠県志』(華齡出版社, 1991年) 238~239頁。
- 32) 山東牟平県志編纂委員会編『牟平県志』(科学普及出版社, 1991年) 335頁。
- 33) 前掲「芝罘ニ於ケル豆素麵」4~5頁。
- 34) 関東都督府委嘱, 浅見亮『龍口事情 附大正2年上半期龍口貿易報告 1913年3月』(関東都督府民政部『山東省視察報文集』, 刊行年不詳) 270~271頁。
- 35) 「山東省龍口及黄県事情」(『通商公報』第47号, 1913年9月11日) 21頁・24頁・26頁。
- 36) 前掲書『山東省視察概要』182頁。
- 37) 注(3)に同じ。
- 38) 注(4)に同じ。
- 39) 注(5)に同じ
- 40) ベッツ『山東省ノ経済的發展』(1915年) 60~61頁。
- 41) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市) 調査報告書』244~245頁・247頁。
- 42) 前掲「山東省の豆素麵」13頁。
- 43) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市) 調査報告書』275頁・277頁。
- 44) 同上書, 291頁・316頁。
- 45) 同上書, 439~440頁。
- 46) 「奉天ニ於ケル豆素麵産出状況」(『通商公報』第731号, 1920年5月31日) 45~46頁。
- 47) 前掲書『山東之物産』第5編(1921年) 85頁。
- 48) 前掲書『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』38~40頁。
- 49) 同上書, 37~38頁。
- 50) 前掲書『山東之物産』第5編(1921年) 85頁。
- 51) 前掲書『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』43頁・47頁。
- 52) 前掲書『山東省視察概要』168頁・170頁。
- 53) 前掲書『山東省招遠県に於ける粉条製造(1931年調)』43~46頁。
- 54) 前掲書『中国実業誌(山東省)』第5編(1934年) 98頁~100頁。
- 55) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市) 調査報告書』, 264頁。
- 56) 同上書, 130頁・145頁
- 57) 関東都督府委嘱, 浅見亮『龍口事情 附大正2年上半期龍口貿易報告 1913年3月』(関東都督府民政部『山東省視察報文集』, 刊行年不詳) 272頁。
- 58) 青島守備軍民政部鉄道部庶務課『羊角溝』(1917年6月調査) 第33葉。
- 59) 前掲書『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市) 調査報告書』28頁。
- 60) 前掲書『山東省ノ利源』24頁。
- 61) 注(5)に同じ。
- 62) 前掲書『山東省ノ経済的發展』60頁。

- 63) 前掲書『東北山東（渤海山東沿岸諸港瀋陽芝罘間都市）調査報告書』247頁。
- 64) 前掲書『山東之物産』第5編（1921年）86頁。
- 65) 前掲書『山東省招遠県に於ける粉条製造（1931年調）』3～4頁。
- 66) 「小清河ノ水運ト羊角溝（1917年8月調）」調査資料第21輯（1921年）270頁。